

## 日欧思想史の比較研究と社会科教育への反映

### Comparative Research of Japanese and Western Thought Histories, and its Reflection to the Education of Social Studies

徳永哲也\*

Tetsuya TOKUNAGA

#### 1. 日欧思想史比較という切り口

私は哲学系の教員として、現代社会の原理を考える「哲学」と、西洋哲学史を紐解く「哲学概論」、そして今日の倫理的諸問題を考える「倫理学」と、倫理学の伝統的理論から倫理問題に迫る「倫理学概論」を、一般教養科目として教えてきた。近年はそれらに加えて、社会進展の底流となった思想を歴史的に講じる「社会思想史」も担当している。1年生から取れる科目と2年生以上向け科目の区別、中学高校社会科(高校は地歴科と公民科に今は分かれているが本稿ではまとめて社会科と表記する)の教職免許にとっての必修・選択の扱いを意識しつつ、これらの科目の役割分担を考えてシラバスを作っている。

思想史の問題意識はどの科目にもあって、「哲学概論」が近代前半までなら「哲学」では現代の哲学を、といった役割分担を考えているし、「社会思想史」では「哲学概論」や「哲学」と重複しない内容を、特に政治的経済的側面から語るようにしている。「倫理学」と「倫理学概論」は倫理思想史ではないものにしてあるが、伝統思想とどう関連するかはそれぞれの文脈に合わせて語っている。

これらの授業研究と哲学的研究の中で、関連文献を改めてレビューするうちに気づいたのは、諸テーマを歴史も含めて比較研究する試みや原理論を発展させて連続的に応用議論に仕上げていく試みがあまりなされていない、ということである。そして、それらの研究を専門家ではない一般読者に包括的に伝える努力があまりなされていない、ということである。

特に上記の諸科目が教職免許用でもあることを考えると、免許を取った学生たちは日本史も世界史も政治経済も中学生や高校生に教える可能性があるのだから、彼らには知識としても考え方としても、「比較」して「応用」して「包括」する視座を獲得してもらいたい。そのための「教養」科目、「教職課程対応」科目を教えているのだと自認している。

教職免許取得卒業生が社会科のどの科目も教えるとは言っても、中学生には中学生なりの、高校生には高校生なりの、教えるべき知識レベル、考察レベルがある。例えば、中学生には「ルネサンスとは文芸復興である」ととりあえず教え、高校生には「ルネサンスとは単に古代の文芸を復興することではなくて…」と教える。中高社会科教師になるなら、その上書きの手順、深め方を一定程度は理解し、「今日どこまで語るか」を意識的に使い分けられるのが望ましい。また、「先生、日本にはルネサンスらしきものはあったのですか」と生徒が興味を持って質問してきたら、「いい質問だね」と応じてその教室に合った答えを出せる、あるいは生徒たちに調べさせ考えさせられるのが望ましい。

これは、「教師はいつでもオールマイティであれ」と言っているのではない。上記のような質問対応ができるには経験年数が必要だろう。言いたいのは、「比較・応用・包括の視座を折に触れて意識する教師として成長して行ってほしい。そのきっかけを大学教育で与えたい」ということである。先の生徒の質問で言えば、気の利いた答えがすぐには出せなくても、「先生も質問されてハッとしたりよ。面白い問題意識だから、次週、一緒に考えてみよう。先生も

\*環境ツーリズム学部教授

準備してくるよ」といった返事はできる教師になるのが望ましい。

私は大学教員として、自らの研究に常に「比較・応用・包括」を意識してきた。この意識は、中学高校社会科教員養成にも必要だと考えている。教職課程学生たちにもこの意識を共有してもらうために、役立つ研究手法と教育的配慮は何だろうか。

私なりの答えの一つとして、2015年に単著『プラクティカル 生命・環境倫理』（世界思想社）を上梓した。この著では、功利主義・義務論・徳倫理学といった伝統的倫理学理論と、生命倫理・環境倫理で論じられる現代的諸問題とを、照らし合わせて「原理から応用へ」という道を示そうとした。例えば「安楽死は許されるか」を、個人個人の情緒や狭い正義感で語るのではなく、宗教史や民俗風習も踏まえて、学問的理論にいったん引き込みながら、今日の状況下に当てはめて議論するようにしている。

そして今企てつつあるのは、「思想史の日欧比較」である。哲学史にせよ社会思想史にせよ、従来の日本の研究者は、「日本史」か、「西洋史」か、そのどちらかの文脈でしか語ってこなかった。そして圧倒的に、西洋（北米大陸もときに含むが多くはヨーロッパ）の思想史のみを語るが多かった。日本思想史は、仏教史や神道史を多く含む研究ならそれなりにあるが、西洋哲学史やヨーロッパ社会思想史のような形で、宗教史の側面を客観的に部分化して思想潮流全体を語るものとしては、蓄積がまだ少ない、というのが私なりの見立てである。私自身がヨーロッパ近現代哲学を学問的ルーツにしているのだが、多数の科目を担当しながら研究を続けるのなら、そして「文学部哲学科」のない大学で哲学系科目を教え、中学高校社会科の教職免許取得にも関わるならば、日本思想を部分的にでも適度に研究と教育に取り込み、これまでの西洋思想研究とかみ合わせて、比較研究と包括的思考を試みよう、と考えている。

## 2. 「思想史」なるもの

さて、日本思想史であれヨーロッパ思想史であれ、何故「思想史研究」を前面に出すのか。ここからまず論じよう。

哲学を専攻する私にとって、“philosophieren(哲学する)”という営みは必然的に思想史研究を含む。現代の世界や人間の本性なり深層なりを考えるにし

ても、全くの徒手空拳では考えが深まらず、その時代その時代の知恵人たちが世界と向き合って考え抜いた問いと答えは大いに手がかりになるからである。

文学部哲学科あるいはそれに類する講座で学生・院生時代を送ってきた研究者たち（私もその一人である）は、学部の演習で、例えばカントの『純粋理性批判』をドイツ語原書で（陰では英訳書や邦訳書に頼りながら）輪読し、議論していた。1年がかりでほんの数ページしか進まず、翌年は次のページから始まる。自分が所属した学部3、4年生の間に、さらには大学院生となってから学部生と合同の演習に出席している間に、どの章を読むことになるかは偶然に左右される。他に哲学史的な科目、概論的な科目もあるのだが、それらとて「昨年度はプラトンまでの話に終始したから今年度はアリストテレスから」といった形になりやすい。「単位を取るのはこの1年間なのだから、1年で起承転結がまとまる教育的配慮のあるシラバスを作ってくれたらいいのに」と、若いころは私も思った。しかしやがて考え直した。「カントをとりあえず通して読みたいのなら、邦訳書なら一人で数か月かければ読める。哲学史を通覧したいのなら、哲学史の書物はいくらでもある。しかし目の前にいる先哲である教授のここでのこだわり方は、今この場でしか聞けない」と。それらすべての授業が血となり肉となり役立っている、とまでは言えないが、歴史上の先哲や現職の先哲から学ぶ思考方法や学問姿勢は、一人になって物事を考える際に自然と教訓になっているものである。

とはいえ、時代は「古典訓読の教養主義だけでよし」とはしてくれない。哲学の世界でも20世紀後半から、「哲学者のための哲学であってはならない。現実諸問題に哲学者はどう答えてくれるのか」という問いかけがなされた。そうした問いと答えが1970年代以降の「応用倫理学」となり、それへの関心から従来型の思想史研究（過去の哲学者の著作をテキストとするもの）よりも現代社会が直面する医療や環境の諸問題への哲学的倫理的考究がクローズアップされる場面は増えた。そうは言っても、多くの哲学者・倫理学者は、それぞれなりの思想史研究を土台としてこそ現代社会の諸問題への考究を有効なものとしている。「古典的著作の研究にこだわる意義がどこまであるのか」という問いかけは近年しばしばなされ、例えば2017年5月の日本哲学会第76回大会は、「哲学史研究の哲学的意義とは何か」を共通シンポジ

ウムのテーマとしていた。その場でも、論者によって「歴史と現代」の比重の違いはあるものの「哲学史研究を捨てて現代社会考究に集中すべきだ」という論調はなかった。

思想史研究は哲学のディシプリンとしてのみ、哲学史と倫理思想史としてのみなされるものではない。経済学にも経済学史や経済思想史があるし、政治学にも政治思想史がある。大学での学生向け科目としてなら「社会思想史」というものが最も代表的で、その担当教員は私のような哲学倫理学者である場合もあれば社会学者、経済学者、政治学者である場合もある。社会思想史は「社会の構造や変動を創った思想を歴史進展の中でとらえて記述するもの」であるから、哲学でもあれば社会学、経済学、政治学でもある可能性がある。社会思想史その他の思想史は、学生への講義として次世代に語られる価値があるし、研究の積み上げが現代社会を読み解く手段になりうる。

### 3. 日本での思想史研究の現状

先に述べたように、日本での哲学史や倫理思想史や社会思想史の研究、そして大学での科目では、西洋哲学、西洋思想に基づくものが圧倒的に多い。東洋思想、日本思想を専門とする学科や講座は少なく、研究者数も相対的にかなり少ない。「学問の砦」のような役割を担う旧帝大系の少数の大学では、中国哲学や仏教学の学科（講座）があって、中国やインドといった東洋の思想が研究されている。日本思想とは、例えば東大では倫理学の二つの講座の一方が西洋思想でもう一方が日本思想を扱う、という形になっている。いずれにしても、東洋思想そして日本思想の学科や講座は数が少ないし、専攻する学生も少ない。哲学系の研究者にとって、本気で研究を続けるための職業は大学教員あたりに限られてくるのだが、一般的な大学の教員採用でも、日本思想研究者は（そもそもその研究者が少ないからでもあるが）採用候補者に残りにくい。

「歴史学」なら、日本史（国史）の学科があり、東洋史も西洋史とさほど劣らないほどの講座数がありそうである。しかし、歴史学の世界で「思想史」はあまり旗色がよくない。かつて、私の知るある歴史学者は、「歴史学者の中でなら、思想史研究者は二流扱いになる。歴史学とは実証科学であり、その実証研究に耐えきれなかった者が思想史に「逃げた」と

見なされるのだ」と語った。たしかに私なりに見渡してみても、日本思想研究者の出身学部学科は、文学部日本史学科でなく、文学部でも国文学科であるとか、法学部政治学科である例が多い。

要するに、日本にあって日本思想史は、あまり研究されてこなかったのである。ピンポイントとしてなら、和辻哲郎や西田幾多郎といった高名な哲学者がいて、彼らを研究対象とした個人研究発表が哲学倫理学系の学会でなされることはある。さかのぼって、本居宣長などに関する発表もある。しかしそれらが、連続的な思想潮流として、「思想史」として語られる場面に出会えることは少ない。

西洋思想なら、例えばカントの研究において、大陸合理論やイギリス経験論の合流地点としての位置づけ、あるいはドイツ観念論思想史の端緒としての位置づけ、という歴史意識は不可欠だという共通認識がある。哲学研究には哲学史研究が常に背後にある、思想研究は思想史研究を伴ってこそ生きる、というのが（西洋）哲学の世界ではある種の常識になっているのである。そして日本国内でも、哲学研究者の多くは欧米の哲学者を研究することをまずは土台としている。思想史研究もヨーロッパ史やアメリカ史の流れでまずは考える。そこで日本思想、日本哲学にも同時に目を向けて、思想史を前面あるいは背景において研究しよう、となればよいのだが、一人の人間にいくつもの役割は果たしにくい。

今日の哲学研究者の多くは、思想的な研究をまずベースに持っておいて（徳永ならヘーゲルをはじめとするドイツ近代哲学）、そのうえで「応用倫理学の現代」にも対応できるようにと求められている（徳永なら生命倫理そして環境倫理）。これだけでもいわば「一人二役」なのだから、同時に日本思想もある程度は研究し、そこに思想史的連続性を見通すなど多忙すぎる話だ、となりそうである。逆に、日本では意外と少ない日本思想研究者が、（一般的な大学で採用されやすくなることも狙って）西洋哲学でも研究実績を積み上げようとしても、そこまで手が回らない、となりそうである。

ここまでの結論として次のように言える。日本の学問研究の世界で、そして大学教育の世界で、哲学・思想の研究は「西洋編」「東洋編」「日本編」と分離されやすく、しかも哲学専攻教員が一人か二人しかいない大学なら、「西洋編」しか存在しないことが多い。西洋哲学史を通史として十分に教えることだけ

でも、一人の教員ではけっこう難しいのだが、そこに日本思想史も入れ込むことは、一人ではやりきれない、というのが実情である。

#### 4. 日本思想史への挑戦

私が日本思想史にも足を踏み入れ、日欧思想史比較研究にまで視野を広げた一つのきっかけは、長野大学で「社会思想史」を継続的に担当することになったことである。

過去に非常勤で務めた大学で社会思想史を教えたことはあったが、単年度であり、私自身がまだ若かったことから、「西洋哲学史とは切り口を変えて、扱う時代や思想家も別に立てて」という程度の“無難な”構想であった。「社会思想史とは何か」という序論から始めて、ルネサンス期、市民革命期、マルクス主義が台頭した時期、を代表的な思想家を挙げながら語るという、“オーソドックスな”社会思想史の授業であった。

長野大学で久しぶりに担当することになって考えたのは、次のようなことであった。一人で「哲学」「哲学概論」「倫理学」「倫理学概論」「社会思想史」(それ以外にゼミや社会科教育法も)をすべて受け持つのは大変だが、いろいろな科目を棲み分けさせて研究教育分野を広げる好機でもある。かつて担当した社会思想史と同じシラバスでも重複のない棲み分けにはなっているが、自身のチャレンジとしても学生の知見を広げる意味でも、新しい分野を開拓しよう。中学高校の社会科教員養成という役割からも、従来の公民的要素、西洋史的要素以外に日本史的要素を加えられれば理想的である。私の学部生・院生時代の勉学は欧米思想にベースを置くものが多かったが、生命・環境倫理研究において日本の風土を考えながら研究する手法は身につけつつあるし、例えば安藤昌益など個人的に勉強してみたい思想家は何人もいる。学会では、日本思想分野のセッションに意識的に顔を出して、いくばくかの知見を蓄積している。自分に残された研究者寿命を考えると、今思い切ってこの分野に取り組み、論文や授業の展開に反映させてもよいのではないかと。

このような考えから、「社会思想史の半分は日本思想を入れる」という方針を立て、自身の勉学と授業資料作りに取り組んだのである。やってみると、「大変だが面白い」。私自身、日本史の文化史レベルでは理解していた思想が、時代背景と政治経済的事情と

かみ合わせながら深入りすると「なるほど。こういう時代だからこの思想が生まれ、受け入れられたのだな」とか「この思想は日本伝統独特に見えて、実は西洋思想のあれと同じ思考回路だな」といった解釈を発見できる。授業にも反映させると、学生の食いつきもけっこう良い。「歴史ドキュメントを見ていたけれど、あの事件の背景にはこんな思想があったんだなと思うと納得できる」といったレポート反応もある。

日本思想史の概説書から個別の思想家の著作、その研究書と読み進めるうちに、すでに持っている西洋思想史の知見との連想が働く。この連想を意識的に拾い上げて語ることができれば、授業も活性化するし研究としても意義が出てくる。残り少ない研究者寿命を費やす課題としてはふさわしいと思えた。若いころなら、「西洋哲学史ばかりやってきた者が3～4年の取り組みで日本思想史を語るなどおこがましい」と思って逡巡したであろう。「10年は研鑽を積んでから語り始めよう」と思ったであろう。しかし年齢を重ねて、ある意味でその遠慮はなくなった。むしろ、「日々気づき始めていることを語る試みをせずに研究者寿命を終えるべきではない。間違いや粗雑さが残っても語ろう」と考えるようになった。

#### 5. 社会思想史の「近代ヨーロッパ編」という定式

このようにして私の思想史研究は、社会思想史の授業への反映と同時進行で進んでおり、その営みは「中学高校の社会科教育でも、例えば高校倫理の思想史分野においても、西洋思想と連動する形で日本思想が語られるのがよい。教師にはその知見を備えておいてほしい」という思いも伴わせている。実際にどのような形で提示できるかをこれから論じるのであるが、その前に、“オーソドックスな”西洋思想史を基盤とした社会思想史とはどのようなものであるかを説明しておこう。

まずは、私が教科書や参考書に指定したこともある有名な著作を、目次を拾って紹介するのが分かりやすいだろう。とはいえ、目次のすべてを書き出すのは冗長になるので、本稿の目的に合わせて省略しながら解説する。その目的とは、「1. 社会思想史の代表的な書物がほぼ西洋思想史であること」、「2. その西洋思想史の中でも大部分はヨーロッパ史、特にイギリス・フランス・ドイツ史であること」、「3. 文

明史全体を均等に見るのではなく、ルネサンスからマルクス主義の興亡の時期、特に市民革命期に焦点を当てていること」を確認することである。

①『社会思想小史』水田洋著、

ミネルヴァ書房刊、1998年新版増補

日本の社会思想史のテキストとして、おそらく最大の古典であり、多くの研究者、大学生に読み継がれてきた書物である。著者は1918年生。東京商科大学卒で経済思想史が専門。アダム・スミスに関する著書が多い。1956年が初版で、1968年に新版、1998年に新版増補、とバージョンアップしている。以下が目次の概略である。

- I 社会思想とはなにか (約15頁)
- II 古代 (約20頁)
  - 1. ギリシア 2. ローマ 3. キリスト教
- III 中世 (約15頁)
  - 1. 教会と封建社会 2. トマス・アキナス
  - 3. 封建社会の崩壊
- IV ルネサンスと宗教改革 (約20頁)
  - 1. 近代社会の形成 2. ルネサンス
  - 3. ヒューマニズム 4. 宗教改革
- V 市民社会の成立 (約50頁)
  - 1. 絶対主義と市民革命
  - 2. 絶対主義時代の社会観
  - 3. イギリス市民社会と経験論
  - 4. フランス絶対主義と啓蒙思想
  - 5. ドイツ市民社会とドイツ観念論
- VI 資本主義と階級対立 (約40頁)
  - 1. 資本主義社会の確立 2. 労働者の反抗
  - 3. フランスにおける革命と社会主義
  - 4. ドイツにおける革命と社会主義
- VII 社会主義の発展 (約45頁)
  - 1. 科学的社会主義の形成
  - 2. 一九世紀後半における展開
  - 3. 第一次大戦までの資本主義と社会主義
- VIII 現代への展望 (約35頁)

②『ヨーロッパ社会思想史』山脇直司著、

東京大学出版会刊、1992年

現代世代の研究者によって書かれた中の代表例である。著者は1949年生。一橋大学経済学部卒。『公共哲学とは何か』(2004年)、『社会思想を学ぶ』(2009年)を著すなど、21世紀も活躍している。以下が目

次の概略である。

第一章 古代ギリシアの社会思想 (約20頁)

- 1. ソフィストたちの社会思想
- 2. ソクラテスの挑戦と死
- 3. プラトンの国家論
- 4. アリストテレスの社会思想

第二章 古代末期と中世の社会思想 (約15頁)

- 1. ストア学派の倫理・法思想
- 2. ヘブライズムと原始キリスト教
- 3. アウグスチヌスの「人間-社会」論
- 4. トマス・アキナスの「人間-社会」論
- 5. 中世後期の政治思想

第三章 政治・宗教・自然観の転換 (約30頁)

- 1. ルネサンス期の政治・社会思想
- 2. 宗教改革の諸思想 3. 近代自然科学の思想

第四章 社会契約思想 (約30頁)

- 1. 抵抗権・主権論・国際法
- 2. ホッブズのリヴァイアサン思想
- 3. ロックのリベラリズム思想
- 4. 十八世紀フランスのリベラリズム
- 5. ルソーの近代文明批判と直接民主主義思想
- 6. スピノザ、ライプニッツ、カントの平和思想

第五章 市民(経済・産業)社会論 (約30頁)

- 1. スミスの自由主義経済思想
- 2. フランス革命後の社会思想
- 3. 初期社会主義思想
- 4. マルクスの社会革命思想

第六章 理性的「人間-世界」観への挑戦

(約20頁)

- 1. ダーウィニズムと社会進化論
- 2. ニーチェとヨーロッパのニヒリズム
- 3. フロイトの「人間-文化」論と精神分析

第七章 社会思想の二十世紀的展開 (約25頁)

- 1. マルクス主義の発展と凋落
- 2. 大衆社会論と批判的社会理論
- 3. 社会思想の今日的課題

③『社会思想史』橋本剛編著、

青木書店刊、1981年

①②に比べるとマイナーな書物であり、20世紀後半の世相を反映してマルクス主義への傾斜が強いという点では個性的である。編著者は1931年生。北海道大学卒で哲学が専門。「マルクス主義」「スターリ

ン問題」をテーマとした著作もある。この書物は、橋本自身が半分以上書いているが、一部を研究室の後輩である岩瀬充自と高田純が書いている。以下が目次の概略である。

序章	社会思想とはなにか	(約10頁)
第I章	近代市民的理論体系の創始者ホッブズ	(約35頁)
第II章	ロックと国民権論への道	(約25頁)
第III章	フランス啓蒙思想とルソー	(約55頁)
第IV章	イギリス古典経済学・功利主義 とJ.S.ミル	(約40頁)
第V章	理性主義の哲学的完成とドイツ観念論	(約25頁)
第VI章	初期社会主義の諸思想	(約15頁)
第VII章	マルクス、エンゲルスにおける マルクス主義の形成とその展開	(約30頁)

以上の①②③から、次のようなことが言える。

(1) 日本における社会思想史は、「西洋思想史」であることを自明としているように思われる。

上記の3人の著者は、経済学や社会学や哲学をかなり包括的に見渡す見識のある研究者であり、日本の現状に対する考察・発言もできる（現にしてきた）人物であると思われるが、その彼らが社会思想史の書物を書くとなると、上述の目次のようになる。そこに「なぜ東洋思想や日本思想に手を伸ばさなかったか」という弁明はない。弁明不要の「常識」になっているのである。

これは、この3人に限ったことではない。日本で「社会思想史」と銘打つ書物のほぼすべてがそうである。大学での社会思想史の授業の中には、日本のある時代と地域に限定した話がなされていたものもあることを私は知っているが、それはやはりマニアックな例外的存在である。

中国やインドを、さらには日本をフィールドとした「社会」思想史が語られにくかった事情は、それらの歴史と現在を見ればある程度想像がつく。東洋世界全体の話となると遠大になるので本稿では避けるが、私としては、「日欧思想史比較」をテーマに掲げ、「日本における社会思想史」を紡ぎ出そうとしているのだから、少なくとも「日本の社会の思想の歴史」をいかに語るかは、本稿後半でいくらか論じる。

ここでは、「現状では社会思想史がほぼ西洋社会の思想史となっている」と確認しておこう。

(2) その「西洋」の中でもヨーロッパが場所として想定されており、今の国境線でみるとイギリス、フランス、ドイツが思想と運動の展開場面とされることが多い。

「西洋」は今日の常識では北米大陸も含む。しかし、多くの社会思想史の書物では「アメリカ国家とアメリカ人の思想家」は全くかごく少ない紙幅でしか扱われていない。アメリカは（そしてカナダも）、「白人国家」としての歴史は18世紀からとなり、社会形成史や思想史を辿るには歴史が浅すぎるのである。よって「ヨーロッパ史」となってしまうし、目立った市民運動などがあったイギリスとフランス、そしてドイツに注目が集まる。

イギリスは島国なので、まだ輪郭がはっきりしやすく国としての発展史もたどりやすい。しかしフランスは、5世紀のフランク王国、9世紀の西フランク王国といった歴史から考えると、「いつのどれがフランスか」「スイスはずっと別扱いだったのか」と問いたくなる。さらにドイツにいたっては、「神聖ローマ帝国が10世紀から19世紀初頭まであったよな。プロイセンなどの小国分立はいつまでだったかな。オーストリアの併合と分離は？」などの疑問が噴出する。よって「ヨーロッパの代表例はイギリスとフランスとドイツ」と想定するのは、今日の尺度をそのまま歴史にあてがっただけと言える。ただ、今の私たちの立ち位置からイメージしやすくして歴史を考えるという方便が、ここでは許されている。

北米の扱いについては、19世紀後半や20世紀まで時代視野を広げれば、政治経済社会としてのアメリカの存在を無視できなくなる。しかし「まずは近代まで」と見ると、アメリカ独立戦争におけるイギリス出身思想家の影響を論じる程度にとどまる。よって「ヨーロッパ史で社会思想史を語る」という手法は間違っていない、というのが一般的理解になっている。（なお、「北米は白人国家」と見なすことがそもそも問題であり、昔からのネイティブアメリカンやイヌイット、現在のアフリカ系住民やヒスパニック系住民のことも考える必要はあるのだが、本稿ではそこに言及しないでおく。）

(3) その西洋思想史の中でも、古代、中世に割か

れる紙幅は少なく、近代が大いに論じられている。上述①②③の書物での「章」としての扱われ方、ページ数を見るだけでも歴然としている。

古代のプラトンやアリストテレスは、政治思想の最も古典的なものとして哲学でも政治学でも取り上げられやすいが、その思想が紀元前後をはさんで中世に至るまで社会を動かすものとなったかと言えば、そこまでは言えない。哲学思想や人間観の手本として語り継がれはしたが、「社会変革の原動力」とまではならなかった。中世はキリスト教の「教会社会」であり、帝国の興亡や交易の漸進など歴史学的に研究に値する点はあるが、思想的にはキリスト教世界観に覆われていたと見られ、社会の進展の思想的裏付けを見抜こうという研究関心は持たれにくいようである。

よって、やはり近代である。まずは、ヨーロッパ近代化の車の両輪とされるルネサンスと宗教改革が注目される。次いで、個人尊重、自由、民主主義などをキーワードとする啓蒙思想が注目され、市民革命という人類史の大イベントを時代背景として、ホップズやロックやルソーの名前が取り沙汰される。哲学的関心に傾けばカントが、経済学的関心に傾けばスミスが、取り上げられることもある。現代の民主主義の萌芽というわかりやすい着目点があるので、ここが社会思想史の中心に据えられることが多い。

そのあとに、初期社会主義思想を経てマルクスが取り上げられる。マルクス主義にどこまで踏み込み、その後をどこまで追いかけるかは、ここで挙げた3冊以外の書物を見ても、著者によってさまざまである。例えば、第二次大戦前後のフランクフルト学派に言及するのか、さらにはソビエト連邦の崩壊まで扱うのか。どの著者も問題意識は現代まで及んでいるのだろうが、今の国際社会を巻き込んで論じることの限界のなさ、「歴史」としての一応の区切りのつけ方から、「社会思想史の書としてはとりあえずここまで」と切ってまとめているものが多い。

以上の(1)(2)(3)をまとめると、「社会思想史とは西洋の、それもヨーロッパ、特にイギリスとフランスとドイツの社会思想史である」「対象とする時代は、古代から現代までありうるが、近現代、特にルネサンス期から市民革命期が中心とされ、マルクス主義の時代にどこまで言及するかは論者による」という、日本の一応の定式が確認されるのである。

## 6. 社会思想史の「日本編」は可能か

さて、本稿がオリジナリティをもって目指すのは、「定式 of 社会思想史にとどまらず、日本の思想も社会思想史の一部あるいは半分として取り入れよう。そして日本とヨーロッパの社会思想を比較検討して新たな知見を切り拓こう。その可能性と方途を論じる」というものである。そして、「その試みを社会科教育全般に、特に大学教職課程の中学高校社会科教員養成に寄与するものとしよう」というものである。そのために、ここ数年の自主研究や学会参加で準備はしてきた。あと10年じっくりあたためてから、と言っていると研究者・教育者寿命が尽きてしまう。遠慮を断ち切って、思い切って表出しよう、というのが現在の決断である。

社会思想史の日本編を論じる前に、「日本思想史なら世に研究蓄積はあるのか」から問うてみよう。実は、意外なほどその蓄積は少ない、というのが私の見解である。

仏教や神道の文献は数多くあるし、日本における宗教史として読める書物もある。しかし、「市民」と呼びうる人々（多数派の平均的庶民でなくても、「上層市民」「教養市民」に限ってでも）の精神を磨き、時代の巡り合わせが合えば社会的なムーブメントにもなりうる思想潮流の源と呼べる思想、思想家、思想書が日本史にたくさん確認できるかと問えば、そう多くはない。（ヨーロッパ史では、キリスト教がらみの文献はもちろん数多くあるが、宗教書でない市民教養思想書もたくさんあるというのに。）そして、日本のそう多くはない思想家たちを市民社会史の中で系統的に位置づける「日本社会思想史」を標榜する書物は、私の知る範囲では存在しない。

ここ10年ほど気を配って調べてみたのだが、日本思想に関する研究書のまとまったものは、意外なほど最近になってやっと、1980年代や2000年代になってやっと出されているのだなと気づく。例えば、日本の先哲たちを研究する『叢書・日本の思想家』というシリーズが明德出版社から出されたのは、1980年代である。

思想史概説書として定評のあるミネルヴァ書房の『概説〇〇〇〇史』の初版出版時期を並べてみよう。『概説西洋哲学史』（峰島旭雄編著）が1989年であるのに対し、『概説日本思想史』（佐藤弘夫編集代表）は2005年、『概説中国思想史』（湯浅邦弘編著）は2010年である。後者2冊は、日本の大学に日本思想・東洋

思想の学科や講座があり、少ないながら専攻する教授も学生もずつといたという20世紀史から考えると、意外なほど遅い。

「日本思想史」としても蓄積が少ないならば、「日本の社会思想史」はもっと見出しにくそうである。それでも、思想家はある時代、ある社会に生まれるし、思想は社会の現状・進展とともに育まれる。日本に生まれた思想を、当時の社会背景とつなげて、歴史の文脈にのせて、現代という時代への教訓も見出そうとしながら、再発見・再評価することはできないか。その課題に取り組みたい。幸いにも私は、西洋哲学史、ヨーロッパ社会思想史ならいくらかは得意分野である。時代時代に向き合う問いと答えが人類に普遍のものとしてあるのなら、日本の「ある時代、ある社会の思想」を社会思想として読み解いて人類の思想史に位置づけること、日本思想を学びながら西洋思想との比較連携を頭の中で行って「社会思想史の日欧比較」を考究すること、これらは可能なのではないか、と考えているのである。

## 7. 社会思想史日本編の具体的プラン

そうは考えても、まずは一步一步である。どこから始めてどの程度入り込むか。研究としての一定のまとまり、大学での一般教養授業としての伝わりやすさ、社会科教職課程学生への貢献、これらを考えて次のような計画を立てた。

(1) 新しい取り組みを安定的に始めるには、一方では着実な足場が欲しい。社会思想史の大学での授業を考える場合、私が30歳のころ保有していた授業実績、ノート蓄積をうまく活用しよう。あの当時は、ヨーロッパ思想史にアメリカ思想を少し加えた社会思想史西洋編ばかりだったが、ここを精査し、内容を今の私の知見で深めて、かつ日本編を割り込ませることができるように分量はそぎ落として、とりあえず「授業ノート」として「15回分ではなくて8回分」に圧縮する努力をする。

(2) (1) の圧縮において、思想史の時代背景は「ルネサンスと宗教改革からイギリス革命とフランス革命まで」に絞る。以前はアメリカ独立戦争の話やヘーゲル、マルクスの話も入れていたが、そこは割愛する。ヘーゲル、マルクスについては、哲学概論の授業で「社会哲学の担い手」として扱う機会を設けて

いる。哲学概論では古代・中世の話もしている。逆に哲学概論では、マキャヴェリやカルヴァン、ホッブズやルソーの話はしていない。私の担当諸科目の「棲み分け」として、この社会思想史では近代前半に時代を絞り、「近代化の始まりと市民革命の思想」という社会思想史の定式にも合わせて、典型的な部分を扱うことにしよう。これだけでも8回に圧縮するのは大変だが。

(3) かたや、新しい取り組みである社会思想史日本編であるが、時代をどこに設定するか。(2) でヨーロッパの近代前半としたのであるから、平行移動すれば日本史で言う「近世」すなわち江戸期が考えられる。はたしてそれでよいか。その前の戦国期、織豊政権期は入れなくてよいか。その後の明治維新は入れなくてよいか。江戸期にしても270年間すべてを網羅するのか。社会思想史の授業を念頭に置くと、「15-8=7回分」に適する範囲と分量にする必要もある。

(4) (3) の思案の結果、次の二つの理由から「日本の近世（江戸期）の前半、1600年代から1700年代前半に絞る」という選択をした。第一の理由。それ以前、1500年代はまさに戦国の混乱期であり、安定的に「市民とともに育つ思想」がつくられたとは考えにくいし、禅宗などの仏教思想が目立って宗教思想史を紐解くことになってしまう。第二の理由。近世後半は、攘夷論、尊王論（「尊王攘夷」と言うが、尊王思想と攘夷思想は区別して理解しなければならない）が跳ね上がる時代となり、落ち着いて市民（といっても武士や上層町人にまずは限られるが）の生き方を考える時代ではなくなっていくと見られる。また、授業7回という分量からも、近世前半に絞るのが適切である。

(5) ところで、より本質的な問題は、その日本近世の思想家たちが社会思想史に位置づけるに値するかである。そして、日欧比較を考えるなら、当時の日本の思想がヨーロッパ思想と比較研究するに値するかである。それを考えながら歴史書や思想書を研究した私の結論は、「社会思想史にも位置づけられるし、日欧比較研究にも値する」というものである。この結論に至るまでに心配はあった。当時はいわゆる「鎖国時代」であり、武家政権支配の時代である。「閉鎖



的社會」「階級支配社會」に「市民とともに育つ思想」「社會を動かす原動力になりうる思想」など見出せるのか。心配しながらも研究し考察したうえで私の結論は、「見出せる」である。

(6) (5) の結論の中身、「この思想をこう評価し思想史的にこう位置づける」という陳述は、本稿でも一部を披歴するし、今後の論文と書物（兎洋書房からの出版がすでに予定されている）で明らかにしていくが、今はまず、具体的な思想家の名前を挙げてその思想の短い説明を合わせて述べておくのが、プラン提示としてふさわしいだろう。

#### ①林羅山 (1583-1675)

日本朱子学の大成者。徳川家康・秀忠・家光・家綱四代の指南役。羅山をはじめ林一族（林家）は徳川幕府に代々登用された。いわば「官の学」であり「支配正当化の思想」であるが、林派朱子学は日本全国の藩校のテキストとなり、後には皮肉にも、討幕を企てる「志士」たちの教養力を高めることになった。

#### ②中江藤樹 (1608-48)

日本陽明学の大成者。林派朱子学が「官の学」なら中江陽明学は「民の学」と言える。武士の身分を捨てて近江で私塾を開き、庶民教育に当たった。武家の儒学を万人の倫理へと広げ、門下生は他の地方でも活躍した。

#### ③山鹿素行 (1622-85)

「古学」と「士道」の提唱者。日本朱子学、日本陽明学に対して、ある種ルネサンス運動にも似た「古典回帰」を訴え、後の古義学、古文辞学につながった。「武士道」ならぬ「士道」は、「戦なき世の武士」のあり方を考える近代型の政治哲学と解することができる。

#### ④伊藤仁斎 (1627-1705)

山鹿以来の古学派から「古義学」を生み出し、庶民の日常の倫理を説いた。「京都町衆」に属し、京都の代々の商家は町人向け私塾「古義堂」となった。町人の力が高まる時代とともに「堀川学派」として一時代を築いた。

#### ⑤荻生徂徠 (1666-1728)

古学、古義学を受けて「古文辞学」を創始した。古代中国語までさかのぼって思想のルーツに迫ろうとする徹底した原点回帰を実践し、実証的な文献学を

もってしたうえで、現実政治における「経世済民」の為政者責任を唱えた。

#### ⑥本居宣長 (1730-1831)

「国学」の大成者。古学派（古学、古義学、古文辞学）が中国古典にルーツを求めたことに触発され、日本古典を再発見することで日本人の精神構造に迫ろうとした。儒教・仏教よりは神道に接近することになり、幕末から明治にかけての国粹主義のきかけを作ることにもなった。

#### ⑦石田梅岩 (1665-1744)

「石門心学」の開祖。元々は農家の生まれで、商家奉公を経て学問の道に進み、儒教・仏教・神道を融合した庶民の生活哲学を説いた。町人の存在意義を訴え、商人の職業倫理を強調した点で、ある意味では画期的な近代人の像を描いたと評価することができる。

#### ⑧安藤昌益 (1707-62)

東北の農村医師で農民思想家。明治期になってその著が発見され、第二次大戦後に再評価されるようになった「忘れられた思想家」。その自然思想は、今日の環境倫理思想の先取りとも読めるし、農民に寄り添う訴えは、農本主義的な革命思想とも読める。

## 8. 社会思想史として扱う意味

以上、とりあえず私の念頭にある代表的な8人の近世前半期思想家を列挙した。それぞれに付した短い説明は、思想史事典の引用、圧縮ではない。日本における「社会思想史」を意識した私なりのまとめ直しである。あの時代のあの政治経済社会だからこそこの思想が唱えられたのだと、そして時の巡り合わせによっては「官」をあるいは「民」を動かしたのだと、分析でき解釈できるものを叙述することが、私の考える「日本社会思想史」である。そして、江戸期前半という「戦国期のあとの泰平の世」に、時代をつくる思想が意外なほど豊富に生まれていたのだと、研究を深めるうちに気づいたのである。

この時代にヨーロッパの市民革命と同じ精神が日本で共有されていた、などと言っているのではない。それでも、変革期ではなく安定期さらには停滞期と見られがちな日本の近世は、実は大いにダイナミックな思想を、官においても民においても育んでいたのではないか、というのが私の見解であり、この時代の諸思想を日本における社会思想史のヤマ場の一つと評価したい、というのが私の結論である。

「時代をつくる思想」と今述べたが、彼らの思想表明が同時期に社会運動を呼び起こした、などと言っているのではない。それぞれの思想への分析・評価は、今後の論文・書物で述べていくが、すぐ同時に何かの社会進展につながるのではなくても、歴史を俯瞰すると、「やはりここが近代人としての精神的脱皮の一里塚になったのだな」と思える、そんな箇所がしばしば発見できるのである。

例えば、先の⑧で挙げた安藤昌益だが、「忘れられた思想家」と呼ばれるが実は「隠された思想家」なのではないか、と私には思える。江戸幕府を転覆させかねない過激な革命性ゆえに、安藤自身とその周りの者たちはあえて「隠した」のではないか、と考えられるのである。大いなる自然という存在に従うことと万民の平等を訴える主張は、「日本のルソー」とさえ呼べるかもしれない。底辺層農民に寄り添い差別と搾取を否定する主張は、「日本のマルクス」とさえ呼べるかもしれない。幕府が支配する江戸期半ばにあってはまさに「早すぎた思想」であり、隠されたからこそ抹殺はされずに今日の我々の手に（一部ではあるが）届いているわけである。だからこそ、社会思想の一つとして歴史に位置づける役割が、今の私たちに課されているのであり、その役割の一端を私は担いたいと思うのである。

## 9. 日欧思想史比較への道

ここまでで述べたように、日本の近世は、思想的には「安定期」「停滞期」ではなく、十分に近代的なダイナミズムを含むものである、というのが私の主張である。「この時期の思想が社会を革命的に動かした事例はない」と言われるかもしれないが、それを言うならヨーロッパ近代史においても、「思想が唱えられたから社会が動いた」となっているわけではない。

例えば、「ロック思想とイギリス名誉革命」がセットで語られ、ロックがいたから名誉革命が進んだかのような印象を持つ人がいるが、名誉革命の間、ロックはオランダに亡命中であり、『市民政府二論』を公刊したのはその後イギリスに帰国してからである。革命勢力の作戦室でロックが指導していたのではない。名誉革命の正当性を言論であとから裏付ける役割を果たしたのがロックなのである。思想の表出と社会の進展は、あとさきが入り替わることが珍しくない。ヘーゲルの名言、「ミネルヴァのふくろうは夕

暮れになって飛び立つ」に従えば、社会の目立った動きがあってそれが収まる頃にやっと知的に書き留められる、という順序の方が普通なのかかもしれない。

個別の思想表出だとか著作公刊だとかにこだわらなければ、時代の「思潮」と社会の進展はもっと密接に相関している、と言えるだろう。その意味では、ヨーロッパ史にも日本史にも似たところはいくつも見つかる。江戸期の日本は「鎖国」という孤立・国境封鎖のイメージがあるが、中国やオランダを介して物品や知識は入っていたし、同じ時代の世界を空気にして敏感に感じ取る人は、日本の知恵人にはいたと考えられる。ヨーロッパが「近代」になったときに日本だけが「中世の続き」だったとは、全く言えない。

時代時代の技術や芸術や制度を観察すると、そして思想を分析すると、人類の歩調が洋の東西で見事なまでにそろっている箇所が、しばしば発見できる。そして文化背景のために微妙に違っている箇所も発見できる。それらを見て取り、説明し、最初の仮説が間違っていれば修正してまた記述する、という営みは、ときに人類の普遍性を納得させてくれるし、ときに差異があっても背景が分かれば理解しあえる土俵を提供してくれる。比較研究というのは、その納得・理解のためにあるのではないか。それは研究者たち、大学生たち、中学高校社会科教員として次世代を育成するかもしれない若者たちにとっても、意味のあるメッセージになると考えている。

高校社会科のカリキュラムで言えば、「公共」という新科目が、そして「歴史総合」「地理総合」という新科目が、提案されている。「公共」は今の「現代社会」にとって代わり、「歴史総合」と「地理総合」は基礎レベルの必修科目とされるようである。「歴史総合」必修化については、「世界史（現代史部分）だけが必修科目で日本史が選択科目なのはおかしい」という「愛国主義」論者への配慮もあったと見られる。ともあれ、「総合」と銘打つからにはまずは教師側に総合的視座が求められる。自分は大学時代は日本史学科にいたから、西洋史のことは知らない、「日本にルネサンスはあったか」なんて考えたこともない、では総合的な科目は教えられないのである。

先ほど安藤昌益について、「日本のルソー」「日本のマルクス」との呼称を仮に使ってみた。実は「日本のルソー」という称号は、日本政治思想史の定説ではすでに中江兆民（1847-1901。ルソーの『社会契

約論』を『民約訳解』と邦訳して出版し、自由民権運動に影響を与えた) に当てがわれており、それを知っている人は私の呼称に違和感を覚えるだろう。ここでその当否を論じたいのではない。日欧比較の中で、いろいろな時代や人物や言論の照らし合わせを試みれば、多面的な知見が深まる可能性がある、と言いたいのである。そして、こうした知見に触れた大学卒業生が、高校で日本史を教えるのであれば、安藤昌益や中江兆民の名前が出てくるタイミングでルソーやマルクスのことも頭に浮かぶ(すぐその話を高校生に語るかは別として) ようになってほしいのである。

本稿では、以上のような基本姿勢をまずは語っておく。日本の近世前半への評価とヨーロッパ近代との比較、思想家たちの個別研究や比較研究の詳述は、今後の論文と書物で表明することにしよう。

最後に、すでに実践している社会思想史の授業で「日欧比較研究」をどう示して考えさせようとしているかを語る一例として、期末試験に出した論述問題を1つ挙げておこう。

「石田梅岩の町人職業思想は西洋思想の職業召命観に匹敵する、という話が授業であったが、では梅岩の思想と西洋の職業召命観はどこが似ているのか、そしてどこは少し違うのか、ノートを読み比べて自分なりに論じなさい。」——ルターからカルヴァンへと発展した宗教改革の職業観とそれへのウェーバーの重要な指摘を、日本の石田梅岩思想と比較するという、斬新な試みである。受験した学生たちの中には、板書ノートと配布プリントのキーワードをつないだだけという答案を書く者も少数はいたが、ある程度はしっかり文章化してまとめてくれる者が多く、十分考えて大いに深めて思想史的意義を論じてくれる者も予想以上にいた。教育的意味のある良い問題を出せた、と採点しながら思ったものである。

## 【参考文献】

- 『安藤昌益』尾藤正英・松本健一・石渡博明編著、  
光華社、2002年
- 『伊藤仁斎の思想世界』山本正身、  
慶應義塾大学出版会、2015年
- 『江戸の思想家たち』(上)(下) 相良亨・松本三之介・  
源了圓編、研究社出版、1979年
- 『江戸の思想史』田尻祐一郎、  
中央公論新社、2011年
- 『概説西洋哲学史』峰島旭雄編著、  
ミネルヴァ書房、1989年
- 『概説中国思想史』湯浅邦弘編著、  
ミネルヴァ書房、2010年
- 『概説日本思想史』佐藤弘夫編集代表、  
ミネルヴァ書房、2005年
- 『社会思想史』橋本剛編著、  
青木書店、1981年
- 『社会思想小史』(新版増補) 水田洋、  
ミネルヴァ書房、1998年
- 『仁斎・徂徠・宣長』吉川幸次郎、  
岩波書店、1975年
- 『叢書・日本の思想家⑩ 伊藤仁斎 (附)伊藤東涯』  
伊東倫厚、明德出版社、1983年
- 『統道真伝』(上)(下) 安藤昌益、  
岩波書店、1967年、
- 『徳川思想小史』源了圓、  
中央公論新社、1973年
- 『日本思想史新論』中野剛志、  
筑摩書房、2012年
- 『日本政治思想史——十七～十九世紀』渡辺浩、  
東京大学出版会、2010年
- 『ヨーロッパ社会思想史』山脇直司、  
東京大学出版会、1992年